(3) 山口市太郎

慶応3年（1867年）～

明治30年（1897年）

山口市太郎は江戸時代が終わろうとするこんらんした時期に、峯利田の山口宥次郎の長男として生まれました。小学校は家の道向かいの阿弥陀堂にかよいました。ひじょうに勉強がよくでき、その上努力家だったので、自分の教科書はたちまちあんきしてしまい、上級生の本を読むほどだったということです。小学4年生を終えた後、当時山口家にいた士族（もと武士）の野村という人について漢学を勉強しました。

市太郎は、明治20年ころ、利田の青年会をつくり、農業や生活をよくするための指導をしました。青年会では、自分たちの畑・山林をもち、植林をさかんにするために努力しました。また、会津各地の青年会をつくるための指導をしました。

市太郎は、製紙の研究や改良にも目をむけ、製紙については、はるばる山梨県まで出かけて行って研究をしました。のちに、河沼郡製紙改良組合長をつとめました。

市太郎は、明治25年には、「漆業全書」というるしの栽培についての本を東京で出しました。村で、個人で本を出した人は、この人が初めてです。この本に書いてある苗の育て方やうるし液の取り方やろうの取り方などの方法は、今伝えられているものとまったく同じです。うるしの苗は自分の畑と静岡県の伊豆・熱海の農園で育てて、全国各地へ売っていました。